

## メールマガジン「みやぎの自然」 第30号 2005年2月

### ■■■ 目次 ■■■

#### 1 「私と自然保護」

シンガーソングライター みなみ らんぼう

#### 2 「特集」～野生ニホンザルの保護管理について～（第2回）

宮城のサル調査会 会長 伊澤 紘生

（宮城教育大学環境教育実践研究センター 教授）

#### 3 「知っ得情報」～マタギの語源について～

#### 4 「自然保護団体活動PRコーナー」

特定非営利活動法人 環境保全米ネットワーク

#### 5 「お知らせ」

○平成16年度ガンカモ科鳥類生息調査1月調査結果（速報）について《宮城県から》

○自然教室を開催します。《宮城県から》

○宮城県森林インストラクター養成講座受講者募集《宮城県から》

### ■■■ 私と自然保護 ■■■

#### シンガーソングライター みなみ らんぼう

僕は山登りを趣味にしています。ここ十年程は、毎週のように山に登っています。それまではゴルフが趣味でした。自然を相手にするという意味では、似たようなスポーツなのですが、山登りにはスコアカードがありません。その分自由ですが、より厳しく自分と向き合わねばなりません。判断を誤ると、怪我をしたり命にかかわることになります。

また、山登りは、自然に親しむことでもあります。四季折々の瑞々しい草花や木々の緑、水の流れや小鳥達のさえずりなどに、知らず知らずに敏感になっているのに気づきます。そして、こうした美しい自然が、いつまでもあってほしい、と願うのも、また当然のことだと思います。

山はたくましく美しいのですが、一方では開発が進み、無残な姿をさらけ出しているところも、少なくありません。花の群生地が踏み荒らされたり、木を切られたために、土砂災害が起きたりしてい

るところもあります。山や自然は強いように見えても、とても無防備なのです。だからその分、僕達がしっかり見守ってやらなくてははいけません。

それでは一体、僕達はどんなことが出来るのでしょうか。たとえば山にごみを捨てない、ということから始めてみませんか？紙くずやジュースの空き缶、それにタバコなど、ポイ捨てをやめるのです。こんなことなら出来そうな気がしますよね。もちろん粗大ゴミの不法投棄などは論外です。

このような、自然にやさしい気持ちが芽生えたと、あなたも立派な自然保護者の一人です。それから気持ちのいい日は、ちょっと里山でも歩いてみませんか？可愛いスミレが咲いていたり、コブシの花が迎えてくれたり、当たり前なのにいまさらながら空の青さに驚いたりする、もう一人の自分に出会いますよ。

僕がいっしょに山登りする小母さんたちは、山頂で食事したりすると、帰るときには周りを掃除して帰ります。ここまで来ると表彰状ものですよええ。このように、大上段に自然保護を振りかざさなくても。結果的に自然保護になっている、というのがナチュラルでいいですね。

これからの時代は、ますます都市化が進むとともに、だからこそ自然の癒し効果などが期待されています。四季に恵まれて、世界でも屈指の美しい国土の日本だからこそ、自然を大切にしたいと思います。

### **みなみ らんぼう氏のプロフィール**

1944年宮城県生まれ。法政大学卒業後、ラジオ台本作家を経て1971年「酔いどれ女の流れ唄」で作詞、作曲家として、1973年「ウイスキーの小瓶」で歌手デビュー。1976年に「山口さんちのツトム君」がミリオンセラーを記録する。現在はコンサート活動のほか、テレビのレポーターやラジオのパーソナリティー、執筆活動と多方面にわたって活動中。最新エッセイ集に「秋の山のヴィオロン」(リヨン社)がある。

### **■■■ 特集 ～野生ニホンザルの保護管理について～（第2回）■■■**

（このコーナーは連載です。）

**宮城のサル調査会 会長 伊澤 紘生**

**（宮城教育大学環境教育実践研究センター 教授）**

2．農作物被害が発生しないよう予防対策も必要である

サルによる農作物被害は、北は青森県下北半島から南は鹿児島県屋久島にいたるまで、全国津々浦々におよんでいる。しかも被害は増大の、被害地は拡大の一途をたどっている。

被害が発生する。それが一軒とか数軒の農家の被害の段階では、いくら苦情をいっても行政（市町村）が取り上げることはまずない。数年が経過する。被害は拡大し、やがて一つの集落全体に広がる。行政は重い腰を上げ、とりあえず花火を配ったりして、各自が自分の田畑からサルを追ひ払うように指導する。あとは最初の項で書いたように、追ひ払いが追ひ散らしになって、近隣の集落へと急速に被害は飛火していく。そうやって行政は、より上の行政（県や政令指定都市）へ問題を持っていき、被害対策を要請する。より上の行政はさらに腰が重く、また数年が経過する。やがて上の行政は、実態把握と称して、被害を頻発させている群れの生態調査を研究機関等に委託する。調査は通常2年間か3年間である。その結果を待って、名称はさまざまだが、要するに対策会議を立ち上げ、また2年前後議論する。その結果は全国共通で、田畑からの追ひ払いの徹底と電気柵の設置だった。

ところで、被害発生からここにいたるまでの年数を計算すると、優に10年は越えてしまっている。その間に、農作物をたらふく食べたサルの個体数は急増している。そして、群れの中に、道路があって車が走り、家があって田畑があり、人や犬からしばしば威嚇され、そうされてもすぐに隠れられるスギ林やヤブがいたるところにある、そういった環境こそが自分の生まれ故郷だと認識する個体が群れのサルの大半を占めるようになる。サルは生れ落ちてから、研ぎ澄まされた五感で自らの故郷を心身に刻印する。だから、人の住む里で生まれ、そこで育ったサルの故郷は人里であり、その認識はいつまでも消えることがない。

無為無策ならまだしも、農家の苦しみの上に多額の税金や多くの知力や労力を投入して、結果として人の住む里を故郷と思うサルを大量生産して、このあと一体サルをどうしようというのだろう。田畑や民家や車の行き交う道路のない奥山は、人里で生まれ育ったサルたちにとっては、魑魅魍魎（ちみもうりょう）（注1）の住む異界でしかない。サルがそうってしまったあとの、被害防除のため残された唯一の手段は誰でも分かるだろう。そう、サルを捕獲することであり、その結果が毎年1万頭もの銃殺なのである。

ここで、最初に農作物被害が発生した時点に戻って考えてみよう。たった一軒の農家の被害を重大視し、その時点で奥山への「追ひ上げ」を行っていたら、おそらく、ほんの僅かな費用と人力と時間で、群れは簡単に奥山へ戻っていったはずだ。まだ群れのすべてのサルにとって、故郷は奥山であり、人里は恐ろしい、なにをされるかわからない、命の危険にさらさらされる、まさにかれらにとって魑魅魍魎（ちみもうりょう）の住む世界だからである。

自然災害は本当に恐ろしい。昨今は火山噴火や地震や洪水に悩まされ続けている。それに対し国や自治体は、起ったあとの万全を期す対策とともに、事前に予知して被害を最小限に食い止める噴火予知や地震予知などに、どれほどの英知と税金をつぎ込んでいることか。狂牛病やSARSも恐ろしい。その拡大を防ぐ水際作戦についても同様だ。癌もこわい。癌の治療法の開発と同時に、癌の予防法や早期発見法にも信じ難いほどの英知と税金がつぎ込まれている。それらに比べたら、問題にならないほど楽で安上がりな、サルの農作物被害の早期発見と予防措置が、なぜこれまで、日本中のただの一ヶ所ですら、実施に移されることがなかったのか。答えはごく簡単で、ここに改めて書くまでもないだろう。

（注1）魍魎魍魎（ちみもうりょう）

山・川・森にすむさまざまなばけもの。

### 3．対症療法的やり方でなく、時間軸を通した対策が必要である

日本のどこの地域でも、急増するサルの農作物被害に苦しみながら、それでも、なんとか被害を少しでも減らそうと、さまざまな工夫がこらされている。最近の流行は最新のテクノロジーを駆使した方法である。

メスザルを捕獲し、電波発信機を首に装着して群れに戻す。その電波をアンテナでキャッチし、群れの居場所や移動方向を確認する。その情報をインターネットのメールを通して、登録者の携帯電話に連絡する。情報には、群れがこれから向うのはどの田畑かという専門家の予想が付け加えられる場合も多い。あるいは、GPSシステムを利用して、サルの発する電波の位置が自動的にキャッチされ、位置情報がそのまま農家の携帯電話へ、という省力化も検討されている。一方、携帯電話等で連絡を受け取った農家の人は、田畑で待伏せし、サルが現れたら即座に追い払いを行い、農作物への被害を最小限に食い止めようというわけである。

しかし、この方法でも、田畑からの追い払いをすることに変わりはなく、先に書いたように、追い払いは結果として追い散らしや追い出しになってしまうのは間違いない。さらに厄介なのは、あらゆる威嚇手段で田畑からの追い払いを行っても、サルはすぐ背後に迫る手入れされていないスギ林やヤブの中に、気配を消してずっと隠れ続けるという行動特性をもっている点である。しかも、かれらは、隠れている間に、田畑でサル追いをする人の性別や年齢の違いに基づく諸種の行動特性、それに威嚇道具の効力までつぶさに観察し、どんどん学習していき、驚くほどの速さで「ずる賢く」なっていく。

おそらく今後も、人はサルの田畑からの追い払い方法に、次々と新たな工夫をこらしていくことだろう。しかし、問題なのは、そういう努力を果てしなく積み重ねていった先、たとえば10年後には解

決するのか、20年後には解決するのか、全くもって見通すことができないという点である。筆者から見れば、このような方法では、10年後、20年後は、農作物被害問題は解決はおろか、被害地域はさらに拡大の一途をたどり、人里のありとあらゆる所でサルが動き回っているという状態になり、ついにサルの出没は市街地にまで及んで、単に農作物被害だけでなく、家の中へ侵入しての狼藉や、女性や子どもへ直接危害を加えるところにまで立ちいたってしまうこと、まず間違いなし。その間に数軒の農家の被害がたとえなくなることがあったにしてもだ。すなわち、人知を絞って対症療法的な方法をいくら講じてもどうしようもないわけで、発想の転換が必要とされるゆえんである。

ところで、サルの寿命は、野生状態ではおよそ25年である。だとすると、20年もたてば、群れのサルのほとんどが入れ替わってしまうと考えていい。また、その半分の10年もたてば、今から生まれる新しい世代がこれまでに生まれた古い世代と入れ替わって群れの中核を占めるようになると考えていい。そうすると、サルが入れ替わる20年先に長期目標をかかげ、世代の入れ替わる10年先を中期目標にし、その上で、これから1～2年間は、これから3～5年間はどうかサルに対処していったら良いかを考えればいいことになる。そして、長期目標（最終目標）を、サルが人里に下りて来ることなく、奥山でかれらの野生を満喫しながら悠々自適に暮らす状態にすることだとして、おそらく誰一人異存はないだろう。

では、具体的にどうしたら良いのか、それはもう少し先で書くことにして、それまで読者諸氏には、サルの寿命や世代交代を念頭に置いて、想像力をたくましくして対策を考えてもらえたら幸いである。

## ■■■ 知っ得情報 ■■■

### マタギの語源について

昨年は宮城県在住の作家、熊谷達也さんが著書『邂逅の森』（文藝春秋）で山本周五郎賞及び直木賞を受賞されました。この作品は、大正年間に身分違いの恋から故郷を追われたマタギの青年の波乱の人生を描いたものです。作品などを通じて、マタギという言葉をお知りになった方も多いと思います。

マタギとは、主に青森県や秋田県など東北地方の山間部に住み、古くから伝えられてきた作法や猟法を重んじてきた狩猟者の集団あるいは個人のことをいいます。マタギの語源には諸説があります。山の鬼より強いので「又鬼」だという説、シナの木（東北ではマダという）を剥いで糸に縫い布や縄をつくったことから「マダ剥」になったという説、又になっている木の枝を使用して獲物を追ったこ

とから「又木」になったという説などがあります。この他、山から山へと跨（また）いで歩くような移動生活をしていることからマタグがマタギに転化したという説、山立が訛ってマダチ→マタギに転化したという説、アイヌ語で狩りを意味するマタクまたは雪中での狩りを意味するマタウンパから来たとする説、インドの屠殺業者マータンガ（男）、マータンギ（女）などの呼称から来たとする説、四国山中で狩りをマトギということに由来するとの説など様々ありますが、現在のところどの説が有力なのかは断定されていません。

ちなみに、仙台市太白区の二口溪谷付近（名取川上流）に「磐司岩」という大岩壁がありますが、この名前はマタギの始祖とされる磐司磐三郎（磐司（次） 磐三郎という2人の兄弟とする伝承もある）に由来するといわれています。

参考図書：『マタギ - 森と狩人の記録』（田口洋美著、慶友社）

## ■■■ 自然保護団体活動PRコーナー ■■■

### 特定非営利活動法人 環境保全米ネットワーク

「世界がもし100人の村だったら たべもの編」（池田香代子＋マガジンハウス編）が今手許にあります。2001年末に出版され、ベストセラーになった「世界がもし100人の村だったら」の同じ作者によるたべものバージョン編です。インターネットの民話としてはじまり、またたく間に世界中に流布していったというのも、むべなるかな、子どもにも今の世界の置かれている状況を一目で教えてくれます。32ページには「村では、この30年のあいだに穀物が1.5倍以上とれるようになりました。肥料は4倍以上つかわれるようになりました。肥料や農薬のつかいすぎで村の農地の65%はすっかりおとろえています。村の水田のうち、日本の水田は1.6%です。でも村の、稲作のための農薬のうち半分以上は、日本がつかっている」と書かれています。（注1）

「日本がもし100人の村だったら、田や畑を耕す人は3人である。」現実を前にして、近代的な便利な暮らしを謳歌している97人の村びとが、残りの3人の村びとにだけは一時代前の農薬や化学肥料に頼らない、手間のかかる農業を続けてほしい、と言えるのかということで、多くの人が逡巡（しゅんじゅん）（注2）していました。そういう中で、現状に納得できない人々が集まって、農薬や化学肥料を一步步減らしていく試みを河北新報という新聞の紙面を借りて、消費者とともにはじめたのが「環境保全米実験ネットワーク」でした。1996年のことです。2年間の実験の成果をもとに1998年には「環境保全米ネットワーク」という市民団体としてスタートを切りました。

農薬や化学肥料を全く使わない稲作に自信を持ってきた生産者から、国で有機栽培を認定する制度が始まるので、認定を是非受けたい、認定機関になってほしいという要望が出始めました。そこで、まず2000年10月、NPO法人になり、2001年9月、有機認定機関として国の認定を受けました。しかし、環境保全米ネットワークに参加している生産者がすべて有機認定を受けているわけではなく、ネットワーク独自の減農薬・減化学肥料栽培で、Bタイプ、Cタイプの認定を受けている生産者もたくさんいます。

今までどおりの消費者との交流活動を行う交流部会と認定を専門に行う認定部会との二本立てで現在の「環境保全米ネットワーク」は運営されています。（文責：横須賀）

詳しいことをお知りになりたい方は

【環境保全米ネットワーク事務局】

〒980-0011 仙台市青葉区上杉1-16-3-5F

TEL：022-261-7348 / FAX:022-261-7488

ホームページ：<http://www.epfnetwork.org/okome/>

E-mail：okome@epfnetwork.org

（注1）

世界の穀物使用量と肥料の使用量は環境庁「平成6年版環境白書」より。「農地のおとろえ」とは、侵食や塩類集積、圧密、養分枯渇、生物学的劣化、汚染などをいう。日本の水田、農薬については、FAOの1986年の統計に基づく「食・農・からだの社会学」榎渥俊子・松村和則編（新曜社）より。農地の劣化については「OECD世界環境白書 2020年の展望」OECD環境局（中央経済社）より。

（注2）逡巡（しゅんじゅん）

勇気がなく、思い切ってやれないで、ぐずぐずすること。しりごみすること。

■■■ お知らせ ■■■

**平成16年度ガンカモ科鳥類生息調査1月調査結果（速報）について《宮城県から》**

平成17年1月14日（金）に今年度2回目のガンカモ科鳥類生息調査が行われました。結果は以下の通りです。

- ・ガン類 96,967羽 (157%)
- ・ハクチョウ類 9,219羽 (109%)
- ・カモ類 47,956羽 (100%)
- ・合計 154,142羽 (131%)

( ) は昨年同時期比。数字は速報値で、今後変動することがあります。

ガン類は、昨年度同時期よりも35,286羽の増加となりました。過去最高の飛来数です。また、化女沼、伊豆沼及び蒲生でトモエガモ（国レッドリスト絶滅危惧 類）が20羽確認されました。詳細については、以下のホームページを御覧ください。

<http://www.pref.miyagi.jp/sizenhogo/seibutu/tyourui/gankamo/H16/2005.1.html>

宮城県環境生活部自然保護課鳥獣保護班

住所：〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町 3 - 8 - 1

TEL：022-211-2673 FAX：022-211-2693

E-mail：sizent@pref.miyagi.jp

ホームページ：http://www.pref.miyagi.jp/sizenhogo/

## 自然教室を開催します。《宮城県から》

### ●森の春をさがそう

期日：2月20日（日）

場所：蔵王野鳥の森自然観察センター「ことりはうす」周辺

内容：雪の蔵王山麓で「かんじき」をはいて冬の不思議を探します。

春を待つ生き物たちの冬越しの技を観察します。

対象：小学3年生以上20名

参加費：300円（保険料として）

申込み：2月7日（月）まで

お問い合わせ、お申し込みは下記までお願いします。

特定非営利活動法人 宮城県森林インストラクター協会

自然教室事務局 TEL：090-1936-0606

#### 宮城県環境生活部自然保護課自然保護班

住所：〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町 3 - 8 - 1

TEL：022-211-2674 FAX：022-211-2693

E-mail：sizens@pref.miyagi.jp

ホームページ：http://www.pref.miyagi.jp/sizenhogo/

### 宮城県森林インストラクター養成講座受講者募集《宮城県から》

森林インストラクターとは、森林を利用した自然体験・自然観察などの野外活動の指導や、森林の育成を通じた森林・林業の普及活動を行う人のことで、養成講座修了後は、自然観察会の講師など、数々の活動をしていただきます。

● 講座内容：樹木、植物、鳥類、動物、昆虫などの知識を、専門講師が実習、講義を通して分かりやすく解説します。

● 募集人数：30人程度

● 受講資格：平成17年4月1日現在、県内在住の満20歳～65歳の健康な方

● 受講期間：平成17年4月～平成18年3月の土曜・日曜日（約20日間）

● 申込方法：申請書および800字程度の小論文を提出

● 申込期限：平成17年2月28日（月）

● 申請資料の請求： 又は

下記ホームページからダウンロードできます。

80円切手を貼った返信用封筒に住所、氏名を明記したものを同封の上、「養成講座資料請求」と朱書き明記した封書にて、県自然保護課（〒980-8570住所不要）へ

#### 宮城県環境生活部自然保護課みどり保全班

住所：〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町 3 - 8 - 1

TEL：022-211-2676 FAX：022-211-2693

E-mail：sizenm@pref.miyagi.jp

ホームページ：http://www.pref.miyagi.jp/sizenhogo/

#### 御意見・御希望・お問い合わせ先など

メールマガジンはHTML形式で配信しておりますが、TEXT形式での配信を希望される方は、メールで御連絡ください。また、メールアドレスを変更された場合にもメールで御連絡ください。

今後もより良いメールマガジンづくりをしていきますので、皆様から御意見・御希望などをお待ちしています。このメールマガジンを友人やお知り合いの方にもぜひ御紹介ください。

来月以降の送信を希望されない方は、誠に恐れ入りますが、下記の連絡先まで御連絡ください。

**【宮城県環境生活部自然保護課】**

〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号

TEL：022-211-2671 / FAX：022-211-2693

E-mail：sizen@pref.miyagi.jp

URL：http://www.pref.miyagi.jp/sizenhogo/